

オリンピックとパンデミック(2)

スペイン風邪の終息直後に行われた1920年アントワープ大会

はじめに

本来2020年7月24日に開催される予定だった「東京2020オリンピック・パラリンピック」は1年間の延期になり、今まさに開催されています。

2019年の暮、中国・武漢市が原因不明のウイルス性肺炎の発症を公表し、翌年の1月には全世界に「新型コロナウイルス」と名前を変えて、感染が拡大していきました。

この新型コロナウイルスはあっという間に世界中に広がり、世界中で人流が止まり、大きなイベントの中止が相次ぎました。世界が閉塞状況に陥るなか、世界保健機関(WHO)が3月12日に「パンデミック(世界的流行)」を宣言、「東京2020オリンピック・パラリンピック」は「開催」から「延期」になったのです。

3月24日、当時の安倍晋三首相は国際オリンピック委員会(IOC)のトーマス・バッハ会長と長時間の電話会談を行い、オリンピック開催は1年延期で合意しました。1週間後、「TOKYO2020」の名称は残したまま、オリンピックは2021年7月23日、パラリンピックは同年8月24日開会式と決まり、124年に及ぶオリンピックの歴史のなかで初めて開催延期が決定したのです。

今回は第一次世界大戦終戦の傷跡も残る中、スペイン風邪の影響もある中行なわれた1920年のアントワープ大会について深掘りしてみましょう。

アントワープで第7回オリンピック競技大会が開催された理由

アントワープ大会が行なわれた1920年は、第一次世界大戦の傷跡がまだ深く残っており、また1918年から世界中で大流行したスペイン風邪はヨーロッパでは収束を迎えようとしていたものの全世界ではまだ収束がみえないという状況でした。このような時代に何故ベルギーのアントワープで第7回オリンピック競技大会の開催が可能になったのでしょうか?

要因のひとつには1920年までにヨーロッパでの感染が収束していたことが挙げられます。全世界でのスペイン風邪の収束はみられなくとも、欧米で収まっていけば、それでよかったという風潮があったのです。今日と異なり、オリンピックは世界中のものではなく、先進国である「欧米のもの」といわれた時代だったのです。また、ベルギーは奇跡的にスペイン風邪の感染拡大を免れた国だったとされ、こうした背景により、開催が可能になったとされています。

第一次世界大戦とクーベルタンンの光と影

第一次世界大戦は1914年7月28日、当時のオーストリア領サラエボ(現・ボスニア・ヘルツェゴビナ)でオーストリア=ハンガリー帝国の皇位継承者であるオーストリア大公フランツ・フェルディナントと妻のゾフィー・ホクテがボスニア人の青年ガブリロ・プリンツェブに暗殺されたことが発端です。

この事件を契機にオーストリア=ハンガリー帝国が宣戦布告すると、セルビアの後ろ盾であるロシアが総動員令を出して対峙し、その後オーストリア=ハンガリー帝国側に同盟を結ぶドイツが付き、一方ロシアにはフランス、英国が加勢し一気に戦火が広がっていきました。総勢25カ国が参戦するなかでも、ベルギーは永世中立国としての立場を貫いていました。しかしそれを無視したドイツの侵攻によって占領下におかれ、国土を蹂躪されるなど大きな損害を被りました。

1918年11月11日、長きに及んだ第一次世界大戦が終わりました。この第一次世界大戦中、1916年に予定されていたドイツのベルリンでの第6回オリンピックが中止されました。そうした中でこのアントワープという地にオリンピック開催の道を開いたのはIOC会長に復帰したピエール・ド・クーベルタンンのオリンピック開催への強い意向があったからとされています。

アントワープ大会は成功だったのか

第一次世界大戦とスペイン風邪の後遺症。いたるところで死臭のするヨーロッパにあって、クーベルタンは「ドイツに占領されて甚大な被害を出したアントワープで開催することこそ、オリンピックを復興の象徴、光明にできる」と考えたのです。ベルギーもまたそうした政治的配慮を感じていたのか、ドイツとオーストリアなどの排除を条件に開催要請を受け入れました。

1920年8月14日、完成間もないアントワープのオリンピック・スタジアムに史上最多の29カ国(当時)が集い、ベルギーの国王アルベール一世が高らかにオリンピックの開会を宣言しました。クーベルタンは「信じがたいほどの暴力の嵐が去り、オリンピックは再び始まった」と喜びを表現しました。クーベルタン自らがデザインし、1914年にパリの百貨店ボンマルシェで製作された「白地に青、黄、黒、緑、赤の5色のつながる輪」が描かれたオリンピック旗が初めて観衆に披露されたのもこの時です。そして史上初めて、ベルギーのフェンシング選手、ピクトル・ボワンがユニホーム姿で選手宣誓をしました。華やかな演出は、「平和と復興を讃える祝祭」として世界中に発信されていきました。

アントワープ大会は歴史的には「平和の祭典」「成功したオリンピック」と今も称されています。しかし、これはIOC側による一方的な視点です。アントワープ大会の前、4年前の1916年の第6回ベルリン大会は第一次世界大戦によって中止になりました。「もし、この大会も開催できなければオリンピック活動は足場を失い、オリンピックそのものが霧散してしまうに違いない。是が非でもこのオリンピックは開催する、いや開催しなければならぬ」という強い意思がクーベルタンにありました。しかし、ベルギーは第一次世界大戦後の再建途上で、財政に事欠き、人々の暮らしもままならない、生きることが精一杯の状態でした。また、1年あまりの短期間ではオリンピック開催のための準備も当然不十分でした。未完成の競技会場が多く、スペイン風邪流行直後にも関わらず衛生面の配慮も不十分で、出場選手たちの不評をかいました。何より、資金難による宣伝不足は市民、国民の関心を呼ばず、空席ばかりが目立つ大会だったのです。

アントワープ大会での日本人の活躍

日本のオリンピック委員会は陸上、水泳、テニスの3競技に16選手を送りこみました。第一次世界大戦の後であり、1918年には米騒動が起きるなど、日本は財政難でした。16名の代表選手の渡航費用は三井、三菱両財閥から協賛金の前払いをうけての参加でした。この大会でテニスの熊谷一弥がシングルスと柏尾誠一郎と組んだダブルスで2位に入り、日本のオリンピック史上初のメダルを獲得しています。

熊谷は、自伝『テニスを生涯の友として』の中で、「設備も不完全、秩序も不整頓」、「これがオリンピック大会の晴れ舞台とはお世辞にも申しがたい」と記しています。これは、決勝で敗れて2位になった腹いせではありません。左利きで軟式テニス出身の熊谷はスピンをかけた独特のショットを得意としていましたが、財政難や準備不足による表面の整えられていない荒れたコートでは、この彼のスピン技術が思うように発揮できず、決勝ではこれまでに一度も負けたことのない格下の相手に敗れたのです。

ちなみに、この熊谷は三菱合資、柏尾は三井物産のそれぞれニューヨーク支店勤務で、海外で技を磨いてきた彼らの実力はかなりのものであり、彼ら以外の日本選手と外国人選手との間には実力に大きな隔たりがあった時代の話です。

終わりに

ともあれ、このアントワープ大会によってオリンピックはその後の隆盛に向かう足元を固め、日本はオリンピック初メダルによって国際舞台での飛躍につなげていくことになりました。アントワープ大会の開催はいろいろな欠点はあったものの、やはりオリンピックを継続することの重要性を認識する大会であったことは疑うべくもないでしょう。

今の日本の状況を見てみると、いまだ新型コロナウイルスの脅威から解放されたわけではありません。国民は繰り返される緊急事態宣言に慣れてしまい、政府は人流を抑制することもできていない状態です。オリンピックを開催することの賛否も二分されたままの開催となり、また多くの競技は無観客になりました。しかし、こうした不確実性の中にあり、また非常に困難な状況である一方、連日報道される選手の活躍に世界中の多くの人々が関心を持ち、心を動かされているのではないのでしょうか。今は、この東京オリンピックがトーマス・バッハ会長の述べた「希望を示す祝祭」となることを信じ、スポーツの持つ力に希望を託す、そんな状況といえるのかもしれない。